

# 若者の地方への定着の意思に影響する町づくり および地域活性化の要素について

## Factors of Urban Development and Local Revitalization that may Influence Young People's Willingness to Settle Down in a Provincial Region

伊豆田 義人 西川 友子  
中川 恵 花摘 麻莉菜

Giido Izuta Tomoko Nishikawa Megumi Nakagawa Marina Hanazumi

### 要旨

本稿では若者の地方への定着の意向に影響する町づくりおよび地域活性化について考察した。本研究は高校生や大学生・短期大学生等の若者が地方への定着に対して持つ考え方や気持ち、ならびに定着の際に望んでいる町づくり、地域活性化の取り組み等を調べるプロジェクトの一端である。そのような中、14個の評価項目により構成される「若者が住みたいと思う地域にはこれらの要素はどの程度必要だと思いますか?」という設問を設け、女子大学生・女子短期大学生を対象とした調査を行った。これらの項目は5段階方式で評価してもらい、収集したデータに因子分析を施した。その結果、4つの因子を導出した後、これらの組み合わせからなる回答者のグループを求め、それぞれの特徴を抽出した。なお、これらにより回答者のグループと評価要素の下で若者が地方に求めるものを考察した。なお、この研究は地域創生や地域活性化の研究に貢献すると期待される。

**キーワード：**地域づくり、地域活性化、地域定着

### 1. はじめに

周知のとおり、超高齢化社会や少子化、地方から都会への若者の流出等と人口の減少を伴う過疎化の負の連鎖は日進月歩に加速し、地方の地域社会を取り巻く環境はここ半世紀にわたって絶え間なく厳しさを増している。この問題の背景や関連研究の現状、政策、取り組み等についてはこのような状況下で若者、特に女子の観点からこれらの課題・問題に取り組んでいる筆者らの報告書に掲載されているのでそちらを参考されたい<sup>[1]-[7]</sup>。

実際に、筆者らはこれまで次のような研究を行っている。家庭や個人的な事情等の制約がなかった場合における若者の都市部への移動に影響する要因の抽出<sup>[7]</sup>や、若者が地方に求める「都会度」の追究している<sup>[2]</sup>。また、本研究の目的は地方から都市部への移住による地域の過疎化と若者の価値観との関係を表すモデルに着目した構成要素の調査<sup>[3]</sup>、東北地方の若者が地域に求めている就職、町づくりと娯楽・買い物の項目を評価し、コンジョイント分析のもとでの回答者のグループ化と特徴づけを行ったほか<sup>[4]</sup>、14個の要因を5段階で評価する「人口8万人規模の地方の市町村に新社会人の若者を定着させるとしたらこれらの要素はどの程度影響すると思いますか?」という質問を東北地方の女子大学生・女子短期大学生に評価してもらい、因子分析および構造方程式モデリング分析による相関関係のモデルを構築している<sup>[5][6]</sup>。

さらに、本研究と密接な関係にあり、研究プロジェクト全体のもう一端を担っている研究<sup>[7]</sup>

では、大学・短期大学・専門学校への進学や企業等への就職の進路選択が具体化し始める高校2年生220人を対象とし、20個の項目を5段階方式で評価する「若者が住みたいと思う地域にはこれらの要素はどの程度必要だと思いますか？」という調査を実施し、男女別および全体のそれぞれの因子が導出したうえで、男女では多少の違いはあるものの、高校生は進路決定の早い段階において将来の暮らしの拠点となる場所に求めているため地方への若者の定着の取り組みにはこの年齢層よりさらに若い世代が在住地域に対し持つ考え方を組み入れる必要があると提言している。

以上のことを踏まえて、本研究では女子大学生・女子短期大学生を対象にし、研究<sup>[7]</sup>と同じ設問に回答してもらっているが、ここでは20個の評価項目ではなく、5段階で評価する14個の評価項目を設け、調査を実施し、因子分析モデルを用いて若い女子が地方に望んでいる町づくりや地域活性化の取り組みの抽出を試みた。

なお、本稿の構成は次のとおりである。第2章では調査方法を紹介し、第3章には、分析結果を提示して第4章に考察をおく。

## 2. 方法

アンケート票と評価項目の主な部分は図1に示す通りである。

<p>[設問] 若者が住みたいと思う地域には下記の要素はどの程度必要だと思いますか？下記の事柄に対する最も当てはまる必要性の度合いに丸を付けてください。数字が大きくなるにつれ必要度は高くなります。</p> <p>評価： 必要度1（最低） 必要度2 必要度3 必要度4 必要度5（最高）</p> <p>項目：</p> <p>Q 1. 観光名所が多い（歴史的な建造物なども含む）</p> <p>Q 2. 物の塗装や道路沿いの整備による街の雰囲気</p> <p>Q 3. 年中ある程度温暖な気候である</p> <p>Q 4. 人が多く商店街が活気にあふれている</p> <p>Q 5. 公共交通機関が発達していること</p> <p>Q 6. はやりのファッション・美容品が入手可能</p> <p>Q 7. 娯楽等が可能な複合施設の存在</p> <p>Q 8. 駅の周辺に店やデパートが集中していて発展している</p> <p>Q 9. 慣行行事が多い</p> <p>Q 10. 若者が集まる場所がある</p> <p>Q 11. 芸人やタレントのライブが定期的にかかれる</p> <p>Q 12. 一年中使用可能なレジャー施設</p> <p>Q 13. スポーツや文化的、芸術的なイベントを楽しめる</p> <p>Q 14. 全国的にTVやラジオ等で活躍している地元の人がある</p>
---

図1 アンケート調査票

データの収集は、2018年7月に東北地方の女子大学生・女子短期大学生の協力のもとで行われた。総勢205人の協力者に14個の評価項目を5段階で評価するアンケートに回答してもらったが、うち5件には不備があったため、最終的には200名のデータを分析している。

回答者は五分の一を占める栄養学系の者を除けば、残りは人文学系の分野を専攻している学生である。また、調査当時、これらの18～20歳の学生は全員東北地方出身で1・2年次を履修していた。そこで、事前に担当教員の承諾を得たうえで、先生方にアンケートの主旨、内容とデータの扱いについて説明を行い、図1に示す設問『若者が住みたいと思う地域には下記の要素はどの程度必要だと思いますか?』の項目を「必要度1(最低)」～「必要度5(最高)」で評価してもらった。学生は自らの意思で同意した上で回答をしている。

データの処理には、Windows10搭載のパソコンを使用したほか、マイクロソフト社の表計算ソフト「エクセル2016」および無償配布の統計処理ソフトR 3.5.1<sup>[8]</sup>とそのRのパッケージpsych<sup>[9]</sup>を活用した。

### 3. 結果

#### 3.1 因子分析

図2は因子分析の結果を示す。ここではvarimax法の回転を施し、4因子のモデルを導出しているが、その個数の決定にはスクリープロットを用いている。これらの4つの因子のcumulative varは0.48で、RMSRは0.03、Tucker Lewis Indexは0.924、RMSEA indexは0.06、そしてFit based upon off diagonal valuesは0.99である。理想的な値との間に少し誤差があるが、correlation of (regression) scores with factors がすべて0.7以上であること等を考慮すると、モデルは回答者の評価を十分に説明できると言えよう。

図3は図2をもとに生成した因子モデルである。ここでは、因子負荷量0.40以上を基準にして変数の説明因子を定義している。そこで、変数「Q1. 観光名所が多い(歴史的な建造物なども含む)」(因子負荷量0.64)と「Q2. 物の塗装や道路沿いの整備による街の雰囲気」(0.55)と相関のある因子MR3を「観光」型と命名した。変数「Q4. 人が多く商店街が活気にあふれている」(0.49)、「Q3. 年中ある程度温暖な気候である」(0.42)及び「Q9. 慣行行事が多い」(0.42)は因子MR4により説明されるため、この因子を「気温・活気」型と命名した。次に、変数「Q6. はやりのファッション・美容品が入手可能」(0.72)、「Q7. 娯楽等が可能な複合施設の存在」(0.64)、「Q8. 駅の周辺に店やデパートが集中していて発展している」(0.64)、「Q5. 公共交通機関が発達していること」(0.62)、「Q11. 芸能人やタレントのライブが定期的に開かれる」(0.56)及び「Q10. 若者が集まる場所がある」(0.55)と相関のある因子MR1を「娯楽・買い物」型と定義した。なお、変数「Q12. 一年中使用可能なレジャー施設」(0.67)、「Q14. 全国的にTVやラジオ等で活躍している地元の人がいる」(0.66)、「Q13. スポーツや文化的、芸術的なイベントを楽しめる」(0.57)、「Q11. 芸能人やタレントのライブが定期的に開かれる」(0.56)及び「Q9. 慣行行事が多い」(0.48)は因子MR2によって説明されるため、MR2を「知名度・レジャー施設」型と名付けた。また、容易にわかるように、変数「Q11」は因子「娯楽・買い物」型と「知名度・レジャー施設」型の両因子によって、変数「Q9」は因子「気温・活気」型と「知名度・レジャー施設」型によって説明される。言い換えると変数「Q11」と「Q9」は複数の因子の組み合わせによって説明されることになる。

次に、変数のスコア(因子の係数)に対し、正の値を「正」、負の値を「負」として、因子毎にその回答者の割合を求めた。結果は表1に示すとおりであり、正負の差は因子「気温・活気」型の10.0%を除けば、4.0%の範囲内にある。

Factor Analysis using method = minres  
 Call: fa(r = MyData, nfactors = 4, rotate = "varimax", fm = "mlmres")  
 Standardized loadings (pattern matrix) based upon correlation m:

	MR1	MR2	MR3	MR4	h2	u2	com
Q6	0.72	0.1	0.05	0.26	0.61	0.39	1.3
Q7	0.69	0.21	0.22	-0.03	0.66	0.44	1.4
Q8	0.64	0.21	0.05	0.05	0.46	0.54	1.3
Q9	0.62	-0.07	0.06	0.27	0.46	0.54	1.4
Q10	0.55	0.25	0.2	0.12	0.44	0.56	1.9
Q12	0.29	0.67	0.22	0.01	0.59	0.42	1.6
Q14	0.19	0.65	0.03	0.12	0.49	0.51	1.2
Q13	0.07	0.57	0.19	0.12	0.37	0.63	1.3
Q11	0.54	0.56	-0.04	-0.12	0.62	0.38	2.1
Q1	-0.12	0.48	0.3	0.42	0.51	0.49	2.8
Q7	0.05	0.32	0.64	0.03	0.52	0.49	1.5
Q2	0.24	0.03	0.25	0.23	0.41	0.59	1.8
Q4	0.35	0.14	0.29	0.49	0.47	0.53	2.8
Q3	0.11	0.06	0.04	0.42	0.19	0.81	1.2

	MR1	MR2	MR3	MR4
SS loadings	2.71	2.02	1.02	0.25
Proportion Var	0.19	0.15	0.08	0.02
Cumulative Var	0.19	0.34	0.42	0.44
Proportion Explained	0.19	0.31	0.16	0.13
Cumulative Proportion	0.19	0.71	0.87	1.00

Mean item complexity = 1.7  
 Test of the hypothesis that 4 factors are sufficient:  
 The degrees of freedom for the null model are 91 and the objective function was 4.8103 with Chi Square of 809.63  
 The degrees of freedom for the model are 41 and the objective function was 0.3  
 The root mean square of the residuals (RMSR) is 0.03  
 The df corrected root mean square of the residuals is 0.05  
 The harmonic number of observations is 200 with the empirical chi square 38.62  
 The total number of observations was 200 with Likelihood Chi Square = 67.95 with pfr  
 Tucker Lewis Index of factoring reliability = 0.924  
 RMSEA Index = 0.06 and the 90 % confidence intervals are 0.032 0.081 0  
 BIC = -119.28  
 Fit based upon off diagonal values = 0.99  
 Measures of factor score adequacy

	MR1	MR2	MR3	MR4
Correlation of regression scores with factors	0.9	0.87	0.75	0.73
Multiple R square of scores with factors	0.81	0.75	0.58	0.53
Multiple R square of scores with factors	0.62	0.5	0.17	0.07

図2 因子分析の出力 (n=200)

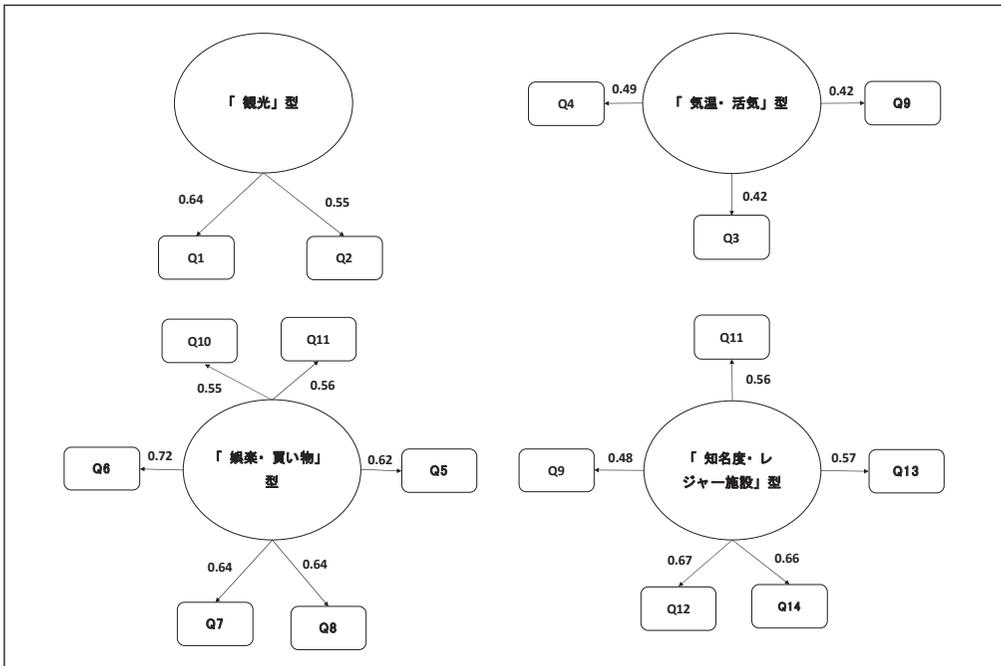


図3 因子モデル

表1 変数スコアの「正」「負」の割合 (n=200)

スコア	「観光」型	「気温・活気」型	「娯楽・買い物」型	「知名度・レジャー施設」型
正	51.0%	55.0%	48.5%	52.0%
負	49.0%	45.0%	51.5%	48.0%

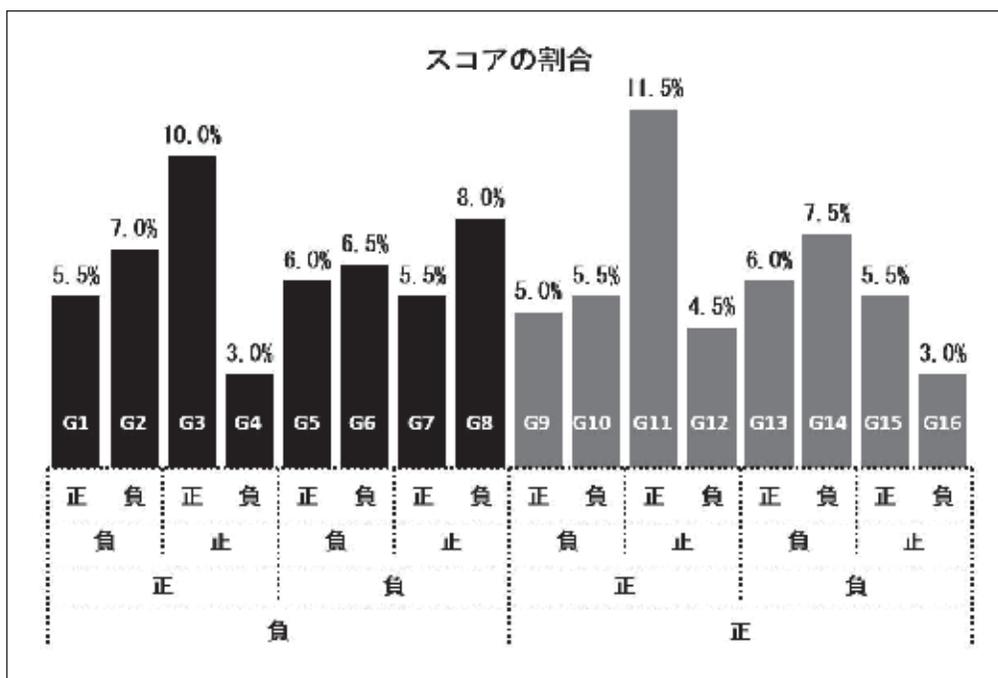


図4 正負スコアの組み合わせの割合 (n=200)

図4は表1の内訳である。横軸の最下段は因子「観光」型、下から2番目は因子「気温・活気」型、下から3番目は「娯楽・買い物」型、下から4番目（横軸に沿っているラベル）は因子「知名度・レジャー施設」型を表している。割合が最も多いのは11.5%で、すべての因子が「正」の組み合わせである。それに続いて、二番目に多いのが、10.0%を占める「観光」型（負）、「気温・活気」型（正）、「娯楽・買い物」型（正）と「知名度・レジャー施設」型（正）の組み合わせである。

さて、正負スコアの組み合わせをグループとし、G1～G16のラベルで表す。各グループに対し、因子「観光」型により説明されるQ1とQ2の平均を求めると図5ようになる。すべてのグループにおいて「Q2. 物の塗装や道路沿いの整備による街の雰囲気」の平均が「Q1. 観光名所が多い（歴史的な建造物なども含む）」の平均より大きいことがわかる。また、「Q2」と「Q1」の両平均値が3.0以上になっているのはG1、G2、G6、G9、G10とG14を除くグループである。したがって、これらが占める割合、つまり5.5%、7.0%、6.5%、5.0%、5.5%と7.5%を除くと、残りの63%の回答者が「観光」型指向であるといえる。ただし、「Q2」はすべてのグループにおいてその平均が3.0を上回っているので、この変数においては回答者全員が肯定的に支持していると考えられる。

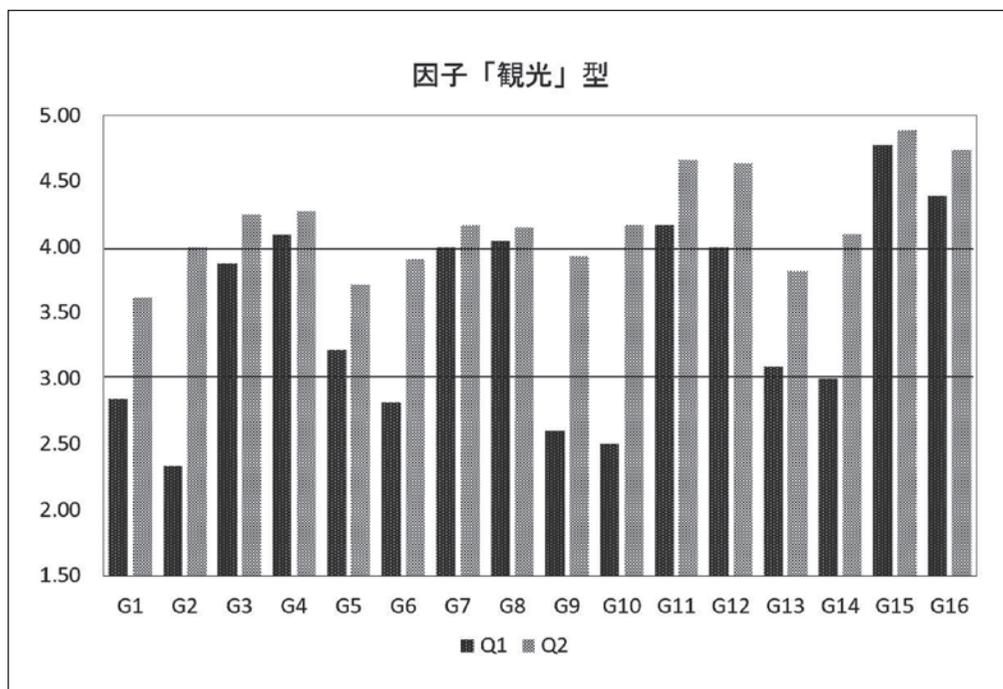


図5 因子「観光」型により説明されるQ1とQ2の平均

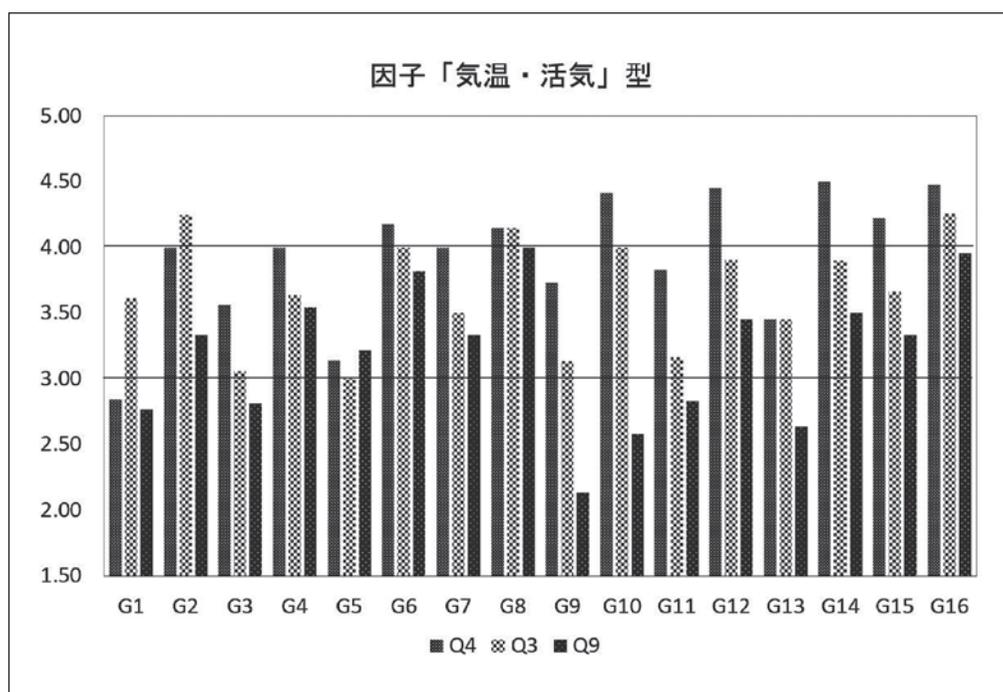


図6 因子「気温・活気」型により説明されるQ4、Q3とQ9の平均

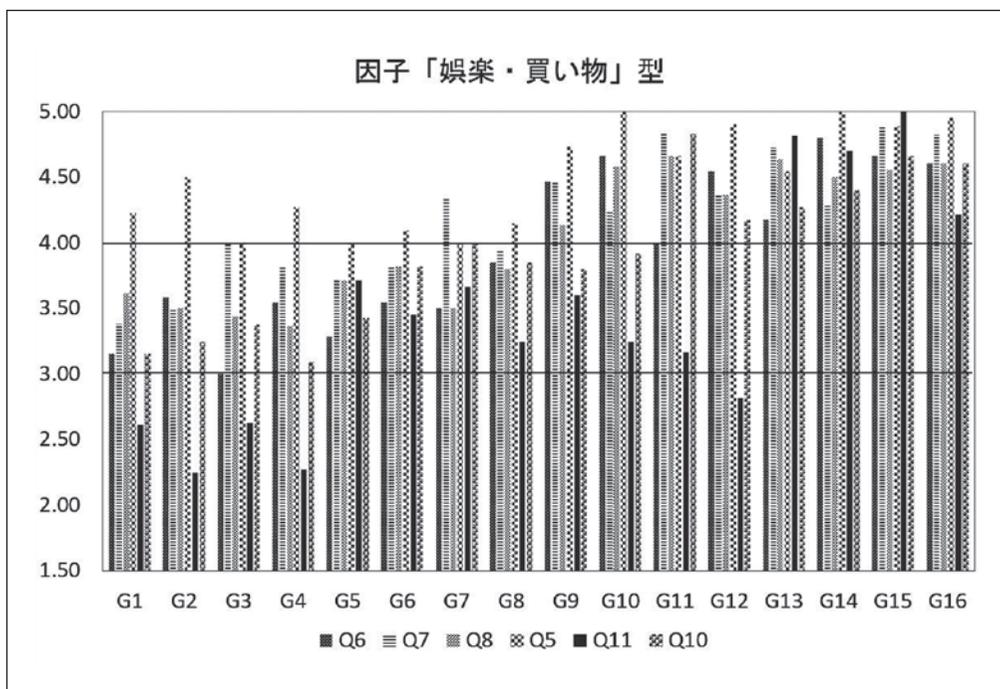


図7 因子「娯楽・買い物」型により説明されるQ6、Q7、Q8、Q5、Q11とQ10の平均

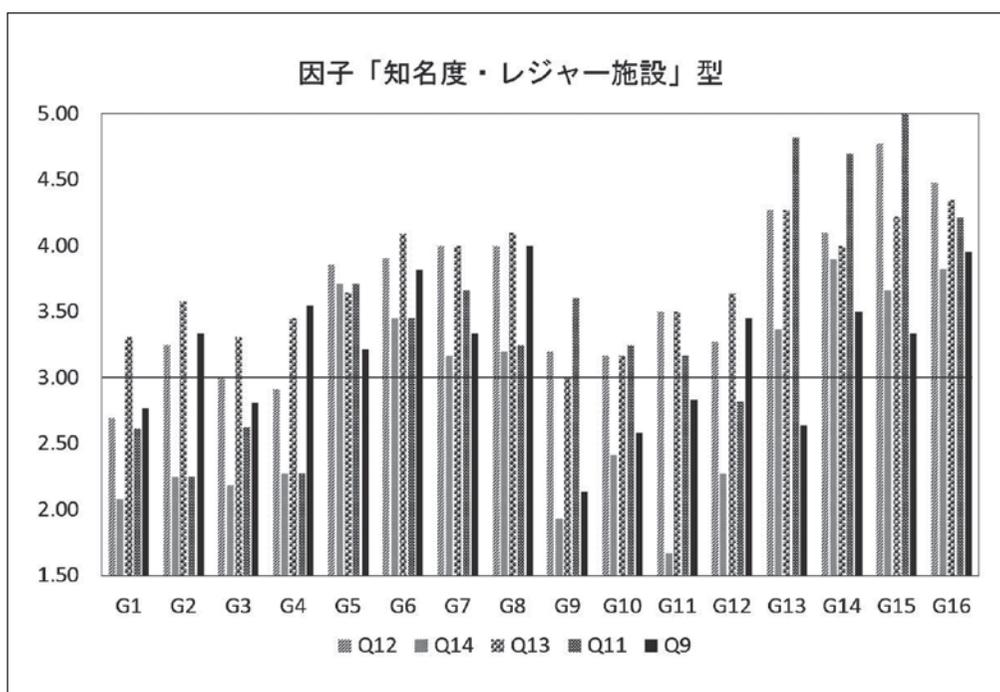


図8 因子「知名度・レジャー施設」型により説明されるQ12、Q14、Q13、Q11とQ9の平均

同様に、図6に示すとおり、因子「気温・活気」型により説明される「Q4. 人が多く商店街が活気にあふれている」、「Q3. 年中ある程度温暖な気候である」及び「Q9. 慣行行事が多い」の平均においては、すべての因子が3.0以上になっているのは、G1 (5.5%)、G3 (10.0%)、G9 (5.0%)、G10 (5.5%)、G11 (11.5%) 及び G13 (6.0%) を除くグループとなっているため、合計で56.5%の学生がQ4、Q3とQ9のすべての変数において「気温・活気」型指向である。また、変数「Q3. 年中ある程度温暖な気候である」のみに着目すると、これはすべてのグループにおいて平均3.0を超えている。

図7はグループ別の因子「娯楽・買い物」型により説明される「Q6. はやりのファッション・美容品が入手可能」、「Q7. 娯楽等が可能な複合施設の存在」、「Q8. 駅の周辺に店やデパートが集中していて発展している」、「Q5. 公共交通機関が発達していること」、「Q11. 芸人やタレントのライブが定期的にかかれる」及び「Q10. 若者が集まる場所がある」の平均を表している。ここですべての変数の平均値が3.0以上になっているのは、G1 (5.5%)、G2 (7.0%)、G3 (10.0%)、G4 (3.0%) 及び G12 (4.5%) 以外のグループであるので、回答者全体の70%がこの因子を支持している。また、変数「Q5. 公共交通機関が発達していること」と「Q10. 若者が集まる場所がある」のみ着目すると、その支持率は100%に達することが分かる。

最後に、「知名度・レジャー施設」型により説明される「Q12. 一年中使用可能なレジャー施設」、「Q14. 全国的にTVやラジオ等で活躍している地元の人がいる」、「Q13. スポーツや文化的、芸術的なイベントを楽しめる」、「Q11. 芸人やタレントのライブが定期的にかかれる」及び「Q9. 慣行行事が多い」の平均は図8のとおりである。そこで、これらの変数の平均値すべてが3.0以上になっているのは、グループG5 (6.0%)、G6 (6.5%)、G7 (5.5%)、G8 (8.0%)、G14 (7.5%)、G15 (5.5%)、G16 (3.0) となっているため、回答者全体の42.0%がこの因子を支持している。なお、「Q13」の平均はすべてのグループにおいて3.0以上であるため、回答者全員がこの変数を肯定的に評価している。

#### 4. 考察

上記を踏まえ、因子型と回答者の割合をまとめると表2になる。

表2 因子型と回答者の割合と備考

順位	因子	割合	備考
1	「娯楽・買い物」型	70.0%	変数「Q5. 公共交通機関が発達していること」と「Q10. 若者が集まる場所がある」は100%を占める
2	「観光」型	63.0%	「Q2. 物の塗装や道路沿いの整備による街の雰囲気」は100%を占める
3	「気温・活気」型	56.5%	変数「Q3. 年中ある程度温暖な気候である」は100%を占める
4	「知名度・レジャー施設」型	42.0%	変数「Q13. スポーツや文化的、芸術的なイベントを楽しめる」は100%を占める

因子の順位は表のとおりであるが、「備考」欄にあるように「Q5. 公共交通機関が発達していること」、「Q10. 若者が集まる場所がある」、「Q2. 物の塗装や道路沿いの整備による街の

雰囲気」、「Q3. 年中ある程度温暖な気候である」及び「Q13. スポーツや文化的、芸術的なイベントを楽しめる」の平均はすべてのグループにおいて3.0以上である。

また、「Q5. 公共交通機関が発達していること」、「Q2. 物の塗装や道路沿いの整備による街の雰囲気」及び「Q13. スポーツや文化的、芸術的なイベントを楽しめる」は変数の平均値を4.0（必要4）と比較した場合にも顕著に表れる。

ただし、回答者が所属する教育機関の所在地か、または、回答者が東北地方にある自身の出身地と対比してこれらの変数の必要性を高く評価した結果なのかは不明である。いずれにしても、結果はこれらの変数に加え、すべてのグループにおいて平均が3.0以上の変数、そして、表2の因子で説明される変数の順位に学生の地方への定着の意思に影響することを示唆している。

なお、女子大学生・女子短期大学生に限定していうと、若者の地方への定着を考える際には先述の変数への取り込みも大事な要素であると言えよう。

## 5. おわりに

本研究では、女子学生のみを対象とした調査研究を行ったため、結果と考察はこのグループに限るものである。今後の課題としては、男子を含め、より広範囲そして一般的な調査を行い、若者全体を網羅したうえで共通な因子および変数を抽出する研究が残されている。

## 謝辞

本研究にご協力くださいました大学生、短期大学生の皆さんをはじめ、大学、短期大学の皆さん、そして著者らが所属する短期大学の教職員の皆様に感謝の意を表する。

## 参考文献

- [1] 伊豆田義人、中川恵、田中 祐希. 都会への地方の若者の移動に影響する要素について. 山形県立米沢女子短期大学付属生活文化研究所報告. 第45号, 61-73, 2018.
- [2] 伊豆田義人、中川恵、田中 祐希. 若者の地域に対する考え方への理解について—「都会度」の感覚を表す要素の特定に基づく試み. 山形県立米沢女子短期大学紀要. 第53号, 69-88, 2017.
- [3] 伊豆田義人、中川恵、西川友子、佐藤祐香. 都市部への移住に起因する地域過疎化と若者の価値観との関係のモデルについて. 山形県立米沢女子短期大学紀要. 第52号, 65-78, 2016.
- [4] Megumi Nakagawa and Giido Izuta. An Investigation of the Depopulation in Northeastern Rural Regions of Japan Based on the Conjoint Analysis Modeling Approach, Proceedings of 2016 Hong Kong International Conference on Education, Psychology and Society (5th HKICEPS), accepted. 2016.
- [5] 伊豆田義人、西川友子、中川恵、阿部鈴香. 若者の地方定着に影響し得る要因の評価について. 山形県立米沢女子短期大学紀要. 第54号, 25-32, 2018.
- [6] Giido Izuta, Tomoko Nishikawa, Megumi Nakagawa and Rinka Abe. A Structural Equation Model for Studying Possible Measures to Lessen Youth Outflow Rate from Regional to Metropolitan Areas in Japan, Proceedings of 2018 Hong Kong International Conference on Education, Psychology and Society (HKICEPS).
- [7] 伊豆田義人、西川友子、中川恵、花摘 麻莉菜. 高校生から見た地方に住みたいと思わせる町づくりおよび地域活性化について. 山形県立米沢女子短期大学紀要. 第54号, 41-53,

- 2018.
- [8] R Development Core Team. R: A language and environment for statistical computing. Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. ISBN 3-900051-07-0, URL <http://www.R-project.org>. 2018.
- [9] William Revelle. Psych: Procedures for Psychological, Psychometric, and Personality Research, Northwestern University, <https://CRAN.R-project.org/package=psych>, R package version 1.8.4. 2018.